紙燭

ちやうちんにつりがねといふ諺○中略此諺はちやうちん出來てより後のことなれば、宗鑑法師が新撰犬筑波集に、片荷かるくて持やかねけん、釣がねをちやうちん賣にことづけてとあるなどや、はじめて物に見えたるならむ、

〔倭名類聚抄十二燈火〕紙燭　雜題云、有紙燭詩、紙燭、俗音之曾久、

〔箋注倭名類聚抄四燈火〕雜題詩無攷

〔下學集器財下〕紙燭（シソク）

〔倭訓栞中編十志〕そそく　紙燭の音也、倭名鈔に見ゆ、類聚雜要に布紙燭見ゆ、唐書に以燭淚濡紙繼之と見えたり、脂燭と書り、出御の時殿上人の役し、御藏の調進するは、杉のほそ木を青紙にてまきたる也、

〔貞丈雜記八調度〕一脂燭の事、是は座敷の上にてとぼすたいまつ也、これをそやうめいとも云也、松明と書也、婚禮にこしよせの時、女房衆そそくをさして迎に出るも、此脂燭を用る也、禁裏にて天子夜の出御に、主殿寮といふつかさの役人兩人、脂燭を持て御先に立つ也、御左に立つ人は、左にそそくを持て、左の方へそそくをなし、御右に立つ人は、右にそそくを持て、右の方へなして立也、扨脂燭は松ノ木にて作り、長サ壹尺五寸程に切りて、ふとさは徑り三分計に丸く削て、先の方を炭火にてあぶりて黑く焦す也、燒て炭にするは惡、其上に油を引てあぶりかわかすべし、扨紙屋紙を廣サ五分計に裁て、脂燭の本を左卷にまく也、脂の字あぶらとよむ字なり、松の木はあぶら有て、能火とぼる也、古書には皆脂燭の字を用たり、又本を紙にて卷たるたいまつ故、紙燭とも書也、脂の字を用事本也、元文天子櫻町院の大嘗會を行ひ給ひし時、用られし脂燭を、或人武者小路殿へ所望して、申受たりしを見しに、是は赤杉の木を用られたり、總體の拵樣右の如し、そそくの圖如左、